

卒業論文

スクールカーストを超える幸福感

2012 年度入学

九州大学文学部人文学科人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2016 年 1 月 提出

要約

本論文は、社会で生活する中で生きづらさを感じる主な原因の1つを人間関係と考え、差別意識が何を基準に発生しているのか、また土井隆義(2012)のいうところの「友だち関係の重さ」をどうすれば軽減できるかを模索し、生きづらさの解消法を発見することを目的とする。

第1章では、現代の中高生の人間関係の在り方を表す言葉として最近登場した「スクールカースト」についておさえた。その上で、「スクールカースト」の中で生きる中高生は、どのようなことに幸福を感じるのかということに着目し、主観的幸福感について言及している。本論文では、家族関係の良好性または趣味の有無が幸福感を高める要因ではないかという仮説を立てた。

第2章では、先行研究の整理を行なっている。まず「スクールカースト」という言葉が出てくる以前の差別の在り方について、見田宗介と E. Goffman の議論を参照した。その後現在の中高生がどのように友人関係を築いているかについて土井隆義らの議論を参照し、最後に「スクールカースト」という現在の差別について、鈴木翔の調査を取り上げた。

第3章では、本研究で実施した質問紙調査の概要について述べている。九州大学の学生を対象に、278名の協力を得ることができた。内容としては、学校適応感やスクールカーストの有無と自分の階級、人生満足度を教育段階毎に尋ねたものと、家族関係について尋ねたもの、さらにスクールカーストの階級の判断要因についてうかがった調査票となっている。

第4章では、実施した調査の分析を教育段階毎に行なっている。スクールカーストがあったと回答した人は、中学校時代は7割強、高等学校時代は6割弱、大学は4割弱となった。特に学校適応感と友人関係の良好性が主観的幸福感に強く影響していることが明らかになった。現在の大学生にとって、円滑な人間関係の形成は生活の中で大きな役割を占めているようだ。スクールカーストの階級の判断要因としては、「容姿」、「その人の性格」、「その人の雰囲気」、「コミュニケーション能力」が多くを票を集めた。先行研究で見た通り、現在では属性以外の面で差別意識が発生しているという結果となった。

第5章は、本論文のまとめである。家族関係が良好であることや趣味の有無は、学校での人間関係に苦しんでいる人を救う機能を期待するには不十分であり、家族関係が良好であっても、没頭できる趣味を持っていても、円滑な人間関係が築けていなければ主観的幸

福感は高まらないということを指摘している。最後に、本論文において達成した点と反省点についてまとめ、本論文を締めくくっている。

目次

はじめに	1
1 本研究の目的	2
1.1 学校生活における人間関係の現状—スクールカーストとは	2
1.2 主観的幸福感への着目	2
1.3 本研究の目的	3
2 人間関係における差別意識に関する先行研究	4
2.1 従来の差別論	4
2.2 現代の若者の人間関係	5
2.3 現在の差別論	8
3 学校生活における人間関係についての実態調査	12
3.1 課題の設定	12
3.2 調査の方法	12
3.3 単純集計結果	13
4 分析	29
4.1 中学校	30
4.2 高等学校	36
4.3 大学	41
4.4 階級の判断要因	47
4.5 自由記述	52
5 まとめ	59
5.1 考察	59
5.2 反省・課題	60

おわりに・・ 61

参考文献・・ 62

付録

調査票・・ 63